

にってん フォーラム

高田馬場^{いち にーさん しっ!}1-23-4 ————— 長岡英司

選挙公報のバリアフリー化に立ちはだかる分厚い壁

————— 澤村潤一郎

シリーズ 点字で生きる～点字制定 200 年～③

知識を開くトビラ ————— 藤下直美

夏休み特別企画 「キッズチャレンジ！」開催報告 — 村上晴香

CWAJにヘレンケラー・サリバン賞 ————— 柳田昌子

川崎市視覚障害者情報文化センターだより — 金子ゆき

生誕110年記念特別連載 創立者本間一夫の生涯③

東京・茨城・増毛「日本盲人図書館」創立から疎開
見えても見えなくても、一緒に楽しめる社会をつくる

ビーラインドプロジェクトの挑戦 ————— 浅見幸佑

私と日点 ————— 中田公子

現場の小窓 ————— 市川弘美

明日につながる支援の力

ご存知ですか？こんな商品

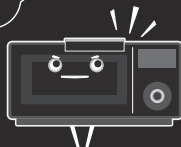
チャリティコンサートのご案内



らく楽アシスト

音声で、 あなたをアシスト。

あたため
がんばります。



レンジグリル

18時30分に
炊き上がります。



ジャー炊飯器

調理中はそばを
離れないください。



IHクッキングヒーター

お風呂の栓は
しましたか？



エコキュート

らく楽アシスト

検索

[https://www.mitsubishielectric.co.jp/
home/shiawase-share/rakuraku/](https://www.mitsubishielectric.co.jp/home/shiawase-share/rakuraku/)



三菱電機株式会社

〒100-8310 東京都千代田区丸の内2丁目7番3号(東京ビル)

●三菱電機お客さま相談センター

家電品の購入相談・取扱い方法

フリーダイヤル

いつもサンキュー 365日



0120-139-365 (無料)

(受付時間 365日 24時間)

フリーダイヤル



FAX 0120-365-088 (無料)

フリーダイヤルをお使いいただけない場合は

TEL 03-3414-9655 FAX 03-3413-4049 (有料)

■ご相談対応

平日

9:00 ~ 19:00

土・日・祝・弊社休日

9:00 ~ 17:00

左記以外の時間は
受付のみ可能です。

*電話番号は変更になる場合がございますので、あらかじめご了承ください。
*電話番号をお確かめのうえ、お間違えないようおかけください。

6点式点字の考案から 200 年

ながおか ひでし
理事長 長岡 英司

11月1日は「日本点字制定記念日」です。今から135年前の1890（明治23）年のこの日に、東京盲啞学校（現・筑波大学附属視覚特別支援学校）で開かれた第4回点字選定会で、教員の石川倉次の案を日本語の点字として採用すると決めたことに因みます。この案を完成する過程で石川は8個の点からなる点字なども検討しましたが、読み書きのしやすさから、6点式で日本語点字を翻案しました。縦方向3点、横方向2点の6点で文字を表すこの優れた触読の仕組みは、幼くして失明した16歳のフランス人、ルイ・ブライユによって1825年に考案されました。今年はそれから丁度200年の節目の年です。日本を含む幾つかの国で、それを記念する催しが行われています。

ブライユの点字はすぐに普及したわけではありません。母校であり教師として働いたバリ盲学校が正式に教育に採用したのは、ブライユの病没から2年後の1854年でした。立場の違いによる意見の対立が、校内で長く続いたのでしょう。同じ年にフランス政府がブライユの点字を公式文字として認めてからは、国内外で広く使われるようになりました。点字は、視覚障害者が自身で自由に読み書きできる最初の手段でした。それを持ったことによる恩恵は、世界中の視覚障害者にとって計り知れません。私自身の人生を振り返っても点字があったからこそ教育を受けられ、仕事に就き、文化を垣間見ることができました。

しかしながら近年は、「点字の使用が減っている」との話題にしばしば接します。デジタル録音や墨字の自動音声読み上げなど、視覚障害者の読み書きに使える便利な手段が増えたことを背景に、点字の存在感がやや低下したのでしょう。とはいえ、点字の必要性や有効性がなくなったわけではありません。聴覚だけでは対応しにくい情報や場面が少なくないからです。そして申すまでもなく、盲聾の皆様にとって、点字は生活に欠かせない存在です。便利な技術や機器の開発が進み、点字がこれからも有効に使い続けられるよう、願う次第です。

選挙公報のバリアフリー化に立ちはだかる分厚い壁

図書製作部長 さわむら 澤村 じゅんいちろう 潤 一郎

今年は点字考案 200 年の記念すべき年ですが、日本ではまた、国政選挙で点字投票が認められて 100 年という節目の年でもあります。

1925（大正 14）年、いわゆる普通選挙法に「投票ニ関スル記載ニ付テハ勅令ヲ以テ定ムル点字ハ之ヲ文字ト看做ス」という規定が設けられました。法律により点字投票が公認されたのは、世界初のことです。

戦後、この規定は公職選挙法に引き継がれ、点字投票は今日あたり前の権利として認められています。こうして視覚障害者の参政権はすっかり保障されたかに見えるかもしれませんが、課題はまだまだ山積しています。

その一つが、選挙公報のバリアフリー化です。国政選挙の場合、各都道府県の選挙管理委員会は、公職選挙法に基づいて候補者の氏名や経歴、政見等を掲載した選挙公報を発行します。しかし、墨字でのみ発行されるため、視覚障害者の多くはそのままでは読むことができません。障害の特性に応じた媒体でも配布されるべきですが、現在の公職選挙法にそうしたことを義務づける規定はありません。

それでもなんとかして選挙情報を全国の視覚障害有権者へ届けようと取り組み始めたのは、「点字毎日」でした。1963（昭和 38）年の衆院選において、選挙公報の簡略点訳版を発行したのです。

全文点訳版の全国配布を実現するためには、分厚い壁を乗り越える必要がありました。短い選挙期間の中で、政党や候補者の膨大な情報を間違いなく点訳、印刷、製本し、投票に間に合うよう届けなければなりません。一企業、一事業所の手に負えるものではありませんでした。ならば、全国の点字図書館・点字出版施設等がタッグを組めば、壁を突破できるのではないかと。こうして結成されたのが、日本盲人福祉委員会「視覚障害者選挙情報支援プロジェクト」です。このプロジェクトで選挙公報の全文点訳に取り組んだのは、2004（平成 16）年の参院選からでした。

プロジェクトでは、2007（平成 19）年の参院選から音声版と拡大文字版の製作にも取り組んでいます。今年 7 月に実施された参院選では、点字版は 19 施設、音声版は 50 施設、拡大文字版は日本視覚障害者団体連合が担当しました。3 媒体とも公式の選挙公報ではありませんので、「選挙のお知らせ」というタイトルで、点字版は「点字毎日」の号外、音声版と拡大文字版は、日本視覚障害者団体連合が発行する情報誌「愛盲時報」の号外という体裁をとっています。それを都道府県の選管が日本盲人福祉委員会から買い上げ、関係施設や個人宅へ配布するのです。今回の参院選では、比例区・選挙区合わせて点字版は約 46,000 部、音声版は約 29,000 部、拡大文字版は約 7,200 部の注文がありました。日本の視覚障害者数は 273,000 人と推計されており、そのほとんどが 18 歳以上の有権者です。必要とする視覚障害者に十分行き渡っているとは言えないのが現状です。

では、選挙公報のバリアフリー化が法律で義務付けられれば万事解決かという、それはそれで悩ましい問題があります。目で読む・見ることを前提に作られた選挙公報のあの紙面を適切に点訳・音訳するには、専門的な知識と技能を要します。それを担う人材の不足と、特に点字版の場合は、製版・印刷に用いる設備の老朽化や後継機の不足が深刻です。将来にわたってニーズに応え続けるだけのリソースが、ソフト面・ハード面ともに足りないのです。

近年では、選挙公報のテキスト付き PDF 版が各選管のホームページに掲載されるようになってきました。しかし、視覚障害者のおよそ 7 割が 65 歳以上の高齢者でまた重度障害者なため、利用は限定的にならざるを得ません。そもそも、あの紙面をパソコンやスマートフォンで正確に読み上げることは困難です。

選挙公報のバリアフリー化には、立法から行政、テクノロジー、福祉の現場にまで跨る分厚い壁が、まだまだ立ちはだかっているのです。



参院選比例区と東京選挙区の
点字版「選挙のお知らせ」

シリーズ 点字で生きる～点字制定200年～③

知識を開くトビラ

社会福祉法人名古屋ライトハウス 日々のくらし相談室 ふじした なおみ
藤下 直美

私の人生に点字が登場したのは、12歳で全盲になった時です。以来、点字は、私の傍らにあります。思い返すと、点字は、私に、さまざまなトビラを開いてくれました。

点字を始めたころはなかなか触読スピードが上がらず、書き間違えても消しゴムで簡単に消せないことにイライラしました。仮名の50音はすぐ覚えられたのに、アルファベットがなかなか覚えられなくて、点字で受けた初めての定期テストは英単語を仮名に変えて覚えるという邪道な方法で挑みました(「tree」を「トチララ」という具合に)。

高校卒業後は大学進学を希望するも、参考書はほとんどなく盲学校の先生や家庭教師の先生と教材を作ることから受験勉強を始めなくてはなりませんでした。でもそれが案外学力アップに貢献しました。

そもそも当時は点字受験できる大学は地元にはほとんどなく、当初進学を希望した大学には推薦入試2か月前で断られ、あわや目標そのものが消失という状況に陥りました。そんな折、ある大学が希望があれば点字受験を行うという話が舞い込んできて、急遽受験することとなり、入学することができました。

就職活動はさっぱりうまくいきませんでした。大学のテキスト点訳が縁で、点字に携わる仕事に就くことができました。点字を使う立場として自分の経験を生かすこともでき、また仕事で得た点字の知識を逆にプライベートに生かすこともでき、本当の意味で点字に愛着を感じるようになったのは点字を生業とできたからだと思います。

ルイ・ブライユの生家にある石板には『すべての見えない人々に知識の扉を開いた』という意味の英文が刻まれているそうです。とてもじっくりくる表現だと思いませんか。点字は、視覚障害者にとって能動的に読み書きができる高性能アイテムです。もちろん万能ではありませんが、この先100年後も変わらず、視覚障害者の知識のトビラを開く力を点字が失わないよう、そのほんの一滴にでもなれたらと思います。

にってんワークショップ

夏休み特別企画「キッズチャレンジ!」開催報告

総務課 ^{むらかみ はるか} 村上 晴香

今年も夏休み期間中の8月2日(土)に「キッズチャレンジ!」を開催し、午前・午後あわせて46名(うち子ども23名)が参加しました。

はじめに、理事長や館長から視覚障害者の暮らしについてのお話がありました。子どもたちは「見えないとどんなことに困ると思う?」という質問を真剣に考え、手を挙げて自分が困ると思ったことを元気に答えてくれました。

視覚障害者への声かけチャレンジでは、町なかで白杖を持った人がいたときにかける「なにかお手伝いしましょうか?」というフレーズを、みんなで声に出して練習しました。点字の仕組みを説明する場面では、子どもたちは真剣なまなざしで話を聞き、点字を読むチャレンジでは積極的に手を挙げて答えていました。自分の名前を点字で名刺に書くチャレンジでは、できた名刺を視覚障害職員が読み上げると「あってる!」と笑顔がはじけました。

後半は館内見学と「さわって!きいて!ユニバーサル体験」へ。自分の家にもある食品や調味料に点字がついていることに驚き、先ほど覚えた点字を読む子もいました。視覚障害職員が点字の本をその場で読み上げると、思わず「おおっ!」と歓声があがります。「もっと点字を勉強したい!」と話す子や、自由研究のために熱心に質問する子もいました。子どもたちが心を動かし、学びを深める素敵な一日となりました。参加者全員には修了証をお渡しし、一人ひとりのがんばりを称えました。これからも、視覚障害の理解と支援の輪が広がるよう努めてまいります。



CWAJにヘレンケラー・サリバン賞

CWAJ やなぎた まさこ
柳田 昌子

この度、東京ヘレン・ケラー協会の第33回ヘレンケラー・サリバン賞を賜り心より感謝申し上げます。CWAJ（College Women's Association of Japan）は1949年、教育と文化交流に取り組む日米の女性数人の活動から発足しました。現在は25カ国からの約400名の会員を持つ非営利ボランティア団体として、奨学金の支給や現代版画展の開催に加えVVI（視覚障害者との交流の会）を始め数々の教育プログラムにも力を入れています。50年にわたり視覚障害をもつ方々の支援を続けてきたVVIにとって、この賞は何よりの励みです。

1974年、「日本の盲人はどんな暮らしをしていますか」とアメリカ人から問われた会員の「周りに目の不自由な人はいないし街でも見かけない、なぜ？」との自問からグループが生まれました。手探り状態の中、方向性を定めることが出来たのは日本点字図書館、都内の盲学校、当事者で早稲田大学生だった指田忠司さんさしだ ちゅうじからのご助言のお蔭です。対象を大学生に絞り複数の大学を訪ねました。まず始めたのが専門書の対面朗読やテープへの録音、点訳です。会員の増加に伴い国際会議へのボランティア派遣、盲学校での英語指導、就職試験に備えての模擬面接、テーブルマナー教室など活動は多様化しました。

これに合わせ対象も広げており、日本視覚障害者職能開発センターの利用者等との英会話の集いも毎回盛況です。ICTの発達でオンライン英会話やニューズレターの配信も可能になりました。今後も社会のニーズに敏感に迅速に応えられる会でありたいと思います。

心に残るエピソードを一つ。1970年代末、日本点字図書館創立者の本間一夫様のお話を伺いました。「母の手をしっかりと握り坂道を上っていった5歳の僕、坂の上にたどり着くと夕陽で真っ赤に染まる空に思わず目を見張りました。そして右目の端に映る母の着物の柄……それが最後の光景となりました。『まあ、きれい！』と言う母のやわらかな声と共に脳裏に浮かびます。今も悔いが残るのは、なぜ母の顔をしっかりと見ておかなかったかということ……」

川崎市視覚障害者情報文化センターだより

防災、今できることを

総務グループ かねこ金子 ゆき

9月1日の「防災の日」を迎えると、小学生の時に防災頭巾をかぶって広い校庭に集合した経験がよみがえります。

当センターでも年に2回の消防訓練を行なっています。「ふれあいプラザかわさき」という、子どもからシニアまで、様々な方が出入りする建物の3階に入っていることもあり、建物内の施設が合同で実施する訓練です。その時々で火災の発生場所は変わるため、「センターの給湯室から出火！」の時もあります。ここにはガスの設備がないので、冷蔵庫か電子レンジの漏電が出火原因になるでしょうか。「訓練、訓練」から始まる全館放送を聞き、各自がヘルメットと軍手を装着します。次の放送に従って、消火担当は消火器を持って出火場所に向かい、救護担当は救急セットを持ち、誘導担当が避難者の人数を確認して、1階ロビーまで誘導します。無事に避難してきた人で満たされたロビーで統括責任者に講評していただき、解散です。普段は他施設の中に入ることはないのですが、訓練の度に建物内の人の多さを実感することになります。

なお、センターの防災用品として次のものを保管しています。飲料水、アルファ米、調理不要のレトルト食品、カセット式のコンロとガス、寝袋、タオル、折りたたみ式トイレなど。こちらは川崎市の施設であるため、大雨や洪水、暴風などの気象警報が発令されてもサービスを継続することが必須です。万一の時にはセンターに宿泊することも想定して、防災用品を備えています。

さらに、今年度は、毎月開催している「音声解説付きDVD映画の体験上映会」の11月と1月の会において、ご希望の方を対象にミニ避難訓練と防災用品の体験、そして、川崎市の「災害時要援護者避難支援制度」の紹介をする予定です。役所に登録しておく災害時に避難や安否確認の支援を受けやすくなる制度なので、日頃の備えの一つとして情報提供したいと考えています。

日本点字図書館は、指定管理者として、川崎市視覚障害者情報文化センターを運営しています。

生誕110年記念特別連載◎創立者本間一夫の生涯③

東京・茨城・増毛 「日本盲人図書館」創立から疎開

本間一夫記念室

関西学院大学を卒業する前年の1938（昭和13）年12月、一夫は齋藤百合から点字用紙8枚の手紙を受け取っていた。

齋藤は全盲女性で、東京女子大学の1期生である。当時低い社会的地位におかれていた視覚障害女性の地位向上のため、夫・武弥の協力のもと、視覚障害女性を対象とした修養施設「陽光会」を東京盲学校（現筑波大学附属視覚特別支援学校）の正門近くに設立していた。一夫はその機関誌「点字倶楽部」の熱心な読者であり、休みに北海道に帰郷する途中、陽光会に立ち寄ることもしばしばあった。齋藤は手紙の中で、一夫に卒業後東京に出てくることを強く勧めていた。日本の中心、東京。一夫の心は強くゆすぶられ、大学卒業後1939（昭和14）年5月、豊島区雑司ヶ谷に転居し「点字倶楽部」の主幹として陽光会で働くことになった。

陽光会に籍を置きながら、夢である点字図書館設立の準備をしていた一夫に、後の視覚障害の世界に大きな影響を与える出会いがあった。翌1940（昭和15）年10月11日、友人の雨池信義に連れられ、社会教育家・後藤静香を訪ねたおり、後藤から蔵書を増やす方法として点訳奉仕運動を提案されたのである。当時は必要とする点訳は有償が当たり前であった。後藤は、欧米では無料点訳で点字図書館の蔵書を増やすことが行われているので、日本でもやりましょうと、自らが主宰する「心の家中央部」での点訳講習会をその場で決め、翌月11月3日に第1回講習会を開催した。現在、全国各地で活動する点訳ボランティアの始まりである。

日本中で皇紀2600年を祝う奉祝式が行われた同年11月10日、住居として2階建ての借家で、点字図書約700冊を蔵書とし「日本盲人図書館」（のちの日本点字図書館）は開館した。開館式には、好本督、雨池信義、肥後喜一、実父の内山述作、他16名が出席し、後藤静香からはお祝いのハガキが、秋元梅吉からは電報が届いた。翌1941（昭和16）年1月16日、陸軍中佐令嬢

いねえだきょう こ
稲枝京子が、森田たま著『随筆歳時記』の1、2月を点訳完成、寄贈される。奉仕者による初めての点訳書となった。これら点訳書の寄贈の他、引き続きの点字出版書の購入、利用者自身による点写書の寄贈等により、蔵書は順調に増加していく。

この借家での開館は4カ月にすぎず、淀橋区諏訪町212（現在の新宿区高田馬場一丁目23番4号）に実家が建てた建物に、翌1943（昭和18）年3月16日・17日、住居と図書館は移転した。

1942（昭和17）年1月、関係者を招き感謝の会を開催、冊子『日本盲人図書館開設一周年』を配布した。その時、後藤静香に連れられてきた

門下生に、以来40数年間一夫の片腕となる加藤善徳^{かとうよし のり}がいた。敷地には余裕があり単独の図書館を建築すべく募金活動を始めたが、資金募集の趣意書は加藤が書いた。時は戦時下であり失明軍人に関する報道もある中で社会の反応はよく、木造2階建ての図書館は10月に上棟式を行い、翌1943（昭和18）年7月に完成した。わが国初の単独の点字図書館である。

しかし戦争は厳しさを増し、新図書館での事業は1年にも満たないうちに疎開を余儀なくされ、1944（昭和19）年3月、茨城県総上村^{ふさかみむら}（現下妻市）^{しもつま}に蔵書と共に疎開し、疎開先から郵送による貸出を続けた。翌1945（昭和20）年春には故郷北海道増毛町^{ましけ}に再疎開。実家の会社社屋に書棚を置き、北海道からも貸出を続けた。一方東京では4月13日の空襲により住居が全焼、図書館も5月25日の大空襲で完成2年たたずして焼失した。

そして8月15日、疎開先のまま終戦を迎えた。（つづく）

（本連載では、新資料により既刊の本間一夫の伝記内容から一部改めて記述しています）



創立時の日本盲人図書館

見えても見えなくても、一緒に楽しめる社会をつくる

ビーラインドプロジェクトの挑戦

一般社団法人ビーラインドプロジェクト 代表理事 あさみ こうすけ 浅見 幸佑

ビーラインドプロジェクトは、「見えても、見えなくても、一緒に楽しめる瞬間を増やす」ことを使命に活動しています。私たちは、視覚障害のある人とない人が共に楽しめる体験を生み出し、そこから生まれる対話や共鳴を通じて、多様な人々が自然に交わる社会を目指しています。現在は、ボードゲームの開発・販売、イベント、研修、そして飲食の四つの事業を柱として展開しています。いずれも「障害を知る」ではなく、「一緒に楽しむ」ことを出発点に設計している点が特徴です。

発足の背景には、代表である私が大学で履修した「視覚障害に関する福祉の授業」があります。授業を通して視覚障害の世界に興味を持ち、友人たちとボードゲーム作りを始めました。そこには、「視覚障害があることで一緒に遊べない時間が増えてしまうのではないか」という疑問がありました。遊びや楽しさの共有は人生を豊かにするうえで欠かせないものであり、誰もがその瞬間を持てる社会をつくりたいという思いがありました。こうして「一緒に楽しさを共有できる場をどうつくるか」を探る挑戦が始まり、やがて誕生につながりました。

活動開始から約3年半。これまで多くのメンバーが出入りしながら会は形づくられてきました。5人の仲間から始まり、視覚障害に特別な関心があったわけではなく、それぞれが自分の興味分野を持ち寄りながら、ボードゲームを作り、クラウドファンディングを実施し、全国でイベントを展開しました。そこから活動に共感した仲間が加わったり、留学や就職活動で抜けたりしながらも、常に人の流れの中で進化してきました。現在はプロジェクト全体として4人、カフェ運営チームとして7人が中心になっています。カフェは、視覚障害のある者3人と、視覚障害のない者4人。互いに役割を補い合いながら運営を進めています。

私たちが目指すのは「視覚障害の有無にかかわらず、自分の得意や好きなこ

とを活かし、心から楽しめる瞬間を増やすこと」です。そのために大切にしているのは三つの Value。第一に「BE LINED」－横並びの目線で横並びの“楽しい”をつくる。第二に「BE A TOUGH DREAMER」－理想を語り、堅実な一歩を重ねる。第三に「BE A FUN WAVE」－共感で終わらず、楽しい共鳴で仲間を増やす。これらを指針に、障害を特別視するのではなく、人と人が出会い共鳴する“普通の楽しさ”を広げていきたいと考えています。

現在の中心事業のひとつが「Moonloop Cafe」です。このカフェは、月の満ち欠けをテーマにした特別な体験ができる場です。視覚障害のあるスタッフが接客や調理の一部を担当し、特にホールではお客様とのやりとりを通じて自然に自分の「見え方」を伝えています。単に飲食を提供する場ではなく、来店者とスタッフが一緒に「体験を共有する」ことを重視しています。

特徴的なのは、月の満ち欠けに合わせて変わるメニューです。たとえば半月の日には、半月のスタッフが店長となり、半月をモチーフにしたチャイを提供します。満月の日には満月をイメージしたチャイが登場し、それぞれ味やスパイスのバランスを微妙に変えながら楽しめます。この仕掛けは、視覚障害のあるスタッフが主体的にお客様を迎えるきっかけにもなっています。またオリジナルメニューの「イッシーコーヒー」は、弱視のスタッフ・イッシーが豆選びからこだわり、フレンチプレスを用いて淹れるコーヒーです。視覚に頼らずとも抽出できる方法を工夫し、出展先のカフェオーナー兼バリスタからも認められた一杯として、正式に提供しています。これまで 400 人以上のお客様に楽しんでいただき、カフェの看板メニューの一つとなっています。

私たちがこのカフェで目指しているのは、「視覚障害のある人だからこそ一緒に生み出せる感動体験」を広げることです。それは新しい働き方のかたちであり、やがては社会の新しい当たり前になると信じています。現在は週に 1 回のオープンですが、売上を安定させ、将来的には常設店舗を構えることを目標にしています。場所は富士見ヶ丘駅から徒歩 5 分の「しんきろう蜃気楼珈琲」です。詳しくは、ホームページをご覧ください。

私たちは、カフェ、ボードゲーム、イベント、研修の活動を通じて、「見えても見えなくても一緒に楽しめる瞬間」を広げ続けています。この挑戦はまだ始まったばかりですが、一步一步、確かな形にしていきたいと考えています。



私と日点

な 中 きた 公
点訳ボランティア 田 子

私が日点を知ったのは、新聞に載っていた「日点による点訳の通信教育」の記事でした。すぐ応募し、テストを受けて、通信教育にて点訳の講座を受けました。子供を友人に預けてのスクーリングにも通いました。そして蔵書の点訳をはじめたのが1975年の夏でした。はじめは、いろいろな方面から点字のことを理解するためにと点字板をつかつての作業でしたが、まもなくタイプライターになりました。いろいろな新しい点字の規則ができ、また変化して、それに対応していかなければなりませんでした。

初めの頃は、1冊終わるごとに本間先生から礼状を頂き恐縮したものでした。

1986年から希望点訳が随時入り、その時は蔵書点訳を中断しての作業になりました。依頼は、高校・専門学校・予備校等の教科書や問題でした。記憶に残るのは高校の社会科の教科書です。入学試験の合格発表があってから新学期開始までの短期間に第1巻を間に合わせなければなりません。また、教科の性質上、グラフや図など多いものでした。図はすべて手作りで、裁縫に使うルレットや細い糸やテープ、感触の違う紙などを使い、試行錯誤しながら完成させたものでした。

点字板やタイプライターの頃は、まず1冊、最初から最終ページまで固有名詞の読みなどを調べてから、やっと点訳開始です。それでも書き間違いや脱文などは出てきます。次ページまで影響が出ないように、必ず1ページ打ち終わるごとに見直しました。間違いがあれば1ページ打ち直しです。5、6マス以下のときは、不要な点を潰してたいらにし、薄めた合成糊を塗って乾かして、新しく打ち直しました。そのうちにパソコン入力になり、点訳作業は楽になりました。

校正もさせていただきましたが、とても勉強になりました。

以前は、読者の方からのお便りを日点を通して頂くこともあり、点訳の励みになりました。

1冊を完訳して最終巻を送った日、パソコンになってからは全ファイルを日点に送信した日が、この50年間の私の生活の句読点でした。

生活訓練と図書サービス

自立支援課 市川 弘美
いちかわ ひろみ

自立支援課では、歩行やスマホ、パソコン、点字等の生活訓練を実施したり、お困りごと等の相談対応をしています。

訓練に至るプロセスは「最近急に見えにくくなり、外出や身の回りのこと、仕事、余暇活動に支障が出るようになった。今後は不安……」といった相談を電話で受けることから始まります。遠方の方にはその場で情報提供をして終了することが多いですが、東京近郊の方には後日当館で面談を行ないます。

面談では、現在の見え方をはじめ生活面でのお困りごと、利用している福祉サービス、家族や地域・視覚障害者とのつながり、趣味などをじっくり聴き取ります。

面談でよく耳にするのは「見えていた時は、読書が趣味だった」という言葉です。「見えなくなっても、読書を続けられますよ!」とお伝えし、録音図書や電子書籍が豊富にあること、読みたい本が製作されていなければプライベートサービスを利用できることを説明します。すると、感激して図書サービスの利用者登録をされ、紙の本に未練のあった方も一度利用するとその便利さと楽しさにハマり、ヘビーユーザーになっていきます。

訓練生からは「再び本に浸れる時間を持てて幸せ」「ボランティアの方達のおかげで読書が続けられる。いつか恩返しをしたい」等々、紙面に書ききれないほどの感謝の言葉を日々いただいています。

仕事を続けながら通う訓練生の中には、資格取得を目指したり、日々の業務で関連書を読まなければならない方もいらっしゃいます。訓練に通う前は、紙の本に目を近づけわずかな残存視力で読むため大変な時間と労力をかけていたそうで、このような訓練生にとっても図書サービスの意義は大きいです。

また、訓練を卒業した方達を図書の貸出やプライベートサービスのカウンターで見かけることも多く、読書が生活の支えになっていると感じます。

これからも、スキルを習得する生活訓練と図書サービスの利活用により訓練生の人生が豊かなものになるよう、関係部署と連携しながら努めていきます。

◆ ◆ ◆ 明日につながる支援の力 ◆ ◆ ◆

このコーナーでは、当館をご支援くださっている団体・企業などをご紹介します。(総務部)

チャリティイベントへのご協力

当館では、収入を運営のための費用に充当するチャリティイベントを開催しています。かつては春秋年2回のチャリティ映画会、年1回のチャリティコンサートと、年3回、開催しておりました。

映画会は、1970年に『ふれあい』と『パリの空の詩』の2本立てで第1回を開催しました。旧渋谷公会堂、なかのZERO大ホールなどの会場を借りて実施しておりましたが、2020年の秋を最後に、新型コロナ感染拡大とともに、入場者の減少といった時代の流れもあり終了いたしました。

コンサートは、1978年、ボランティアの方々の運営によりイイノホールで当館増築費用のためのチャリティコンサートが開催され、以後ほぼ毎年開催しております。2003年から同年逝去した創立者の名を付し本間一夫記念チャリティコンサートとし、近年は上野の東京文化会館を中心に開催しております。

これらのイベントには多くの個人のご支援をいただいておりますが、第1回チャリティ映画会から現在のチャリティコンサートまで、55年間にわたりご協力いただいている有限会社大橋洋紙店をはじめ、有限会社瀬川商店、株式会社西武洋紙店、P F U労働組合などの企業、団体からもチケットを購入いただきご支援いただいています。

また、イベント関連の印刷物への広告掲載を通じて、株式会社イオン銀行、国稀酒造株式会社、株式会社マルハチ村松にはご協賛をいただいています。

長年のご協力に感謝申し上げます。

今年度は、本誌最終ページで紹介していますとおり、12月13日土曜日に、「室内楽の愉しみ」と題し、弦楽三重奏、ピアノ四重奏をお楽しみいただきます。

皆様からのご協力をお願い申し上げます。

ご存知ですか?

こんな商品

わくわく用具ショップより、どなたが使っても便利な新商品をご紹介します。ウェブショップからもお買いものができます。ぜひご利用ください。

お問い合わせ 03-3209-0751

URL <https://yougu.nittento.or.jp/>

お薬手帳ケース

〔大きさ〕(幅) 190 × (高さ) 120 × (厚さ) 15mm

〔重さ〕168g

〔販売元〕株式会社 FALCONER

〔価格〕4,000 円(税込み)



このお薬手帳ケースは三つ折り仕様で、スナップボタンでしっかり閉じられる構造です。開くと、最上部はカバー部分、二段目と三段目にはポケットが配置されています。ポケットはA 6サイズが収まるフリーポケットが2つ、カードポケットが20個あり、診察券や健康保険証などのカード類を一括管理できます。三段目の下にはペンホルダーが付属しています。また、本体背

面にもポケットがあり、領収書などを一時的に収納するのに便利です。お薬手帳のほか、医療受給者証、障害者手帳、母子手帳も収納可能で、医療関係の書類やカード類をまとめて管理できる実用性が特長です。外側は柔らかく高級感のある牛革製で、しっとりとした質感が魅力。内側は耐久性に優れたマイクロファイバーを使用し、長く安心してお使いいただけます。カラーはグレージュとダスティピンクの2色です。グレージュは灰色とベージュを合わせた上品で洗練された印象。ダスティピンクは落ち着いた「くすみピンク」で、大人らしい柔らかな雰囲気です。機能性とデザイン性を兼ね備え、幅広い世代の方におすすめできる商品です。

第23回本間一夫記念日本点字図書館チャリティコンサート 室内楽の愉しみ

[日時] 2025年12月13日(土) 14時開演(13時30分開場)
[会場] 東京文化会館 小ホール(JR上野駅 公園口 徒歩1分)
[料金] 4,000円(全席自由)
[曲目] シューベルト: 弦楽三重奏曲 No.1 変ロ長調 D.471
ベートーヴェン: 弦楽三重奏曲 ニ長調 Op.8「セレナーデ」
フォーレ: ピアノ四重奏曲 No.1 ハ短調 Op.15
[出演]



©Ayane Shindo

さわ あき
澤 亜樹
(ヴァイオリン)



©Shigeto Imura

さわ かずき
澤 和樹
(ヴィオラ)



©Julia Wesely

とば さくら
鳥羽 咲音
(チェロ)



すがた りか
菅田 利佳
(ピアノ)

チケットは当館総務課(電話 03-3209-0241)、
わくわく用具ショップのほか、チケットぴあで
もお求めいただけます。

皆様のご来場を心よりお待ちしております。



にってんフォーラム〈第137号〉 2025 秋

発行 2025年10月25日〈年4回発行〉
発行人 長岡英司
編集人 立花明彦
発行所 社会福祉法人日本点字図書館
〒169-8586 東京都新宿区高田馬場1-23-4
電話03-3209-0241(代) FAX03-3204-5641
URL <https://www.nittento.or.jp/>

*本誌の記事を撮影したり光学的に読み取ったりして、SNS等で発信したり
ウェブサイトへ転載することを固くお断りします。

ワクワク! / ドキドキ!



あなたと映画を観たい。

映画みていて!

「スマホで聞く音声ガイド」



NPO メディア・アクセス・サポートセンター

〒106-0041

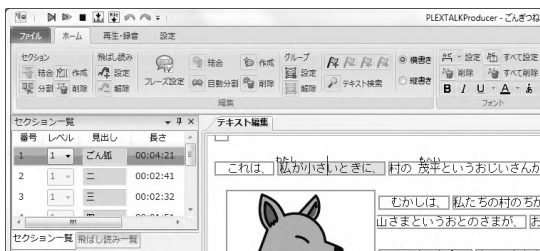
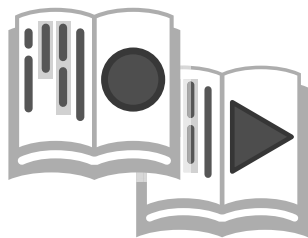
東京都港区麻布台2-3-5 ノアビル1階

MASC

検索



音声 / テキスト / マルチメディア DAISY 製作ツール



PLEXTALK Producer

で作れる 新しい DAISY のカタチ

音声DAISY … 録音図書の標準方式

- ⊗ テキスト文書から音声合成で図書が作れます
- ⊗ CD 書き込み機能で、直ぐに貸し出しできます

テキストDAISY … 音声のない DAISY

- ⊗ データ容量が小さく、受け渡し時間が短縮できます
- ⊗ ルビ振りにも対応し、正しい読みも担保できます

マルチメディアDAISY … 音声とテキストのマルチメディア

- ⊗ ディスレクシアなど合理的配慮の利用対象者が広がります
- ⊗ 既存の音声を使ってマルチメディア化もできます

90 日間無料操作体験版は www.plextalk.com からダウンロードできます

サポート OS	Windows11、Windows10以降 ※ 各 OS は日本語のみサポート ※ARM版Windowsは非サポート
プロセッサ	Intel Core i3 以上推奨
メモリ	4GB 以上推奨

レイアウトツール 文字化ツール (OCR) でデータ取り込みが楽々 !

PLEXTALK Producer 簡単取り込みセット ¥88,000 (税込)

PLEXTALKProducer 単体 ¥49,500 (税込) 簡単取り込みオプション ¥38,500 (税込)

販売元：

シナノケンシ株式会社

〒386-0498
長野県上田市上丸子 1078

製品情報、ご注文はホームページ：

www.plextalk.com

※ Windowsは米国Microsoft Corporationの登録商標です。Intel Coreは米国および/またはその他の国におけるIntel Corporationの商標です。
※ 記載の情報は2025年9月のものです。機能および外観デザインなどは、性能向上その他の理由で、予告なく変更することがあります。PLEXTALK、PLEXTALKロゴはシナノケンシ株式会社の商標です。